

泉鏡花と^{かみがた}〈京阪〉への「おのぼり」

—創作の方法と表現—

西尾 元伸

はじめに

泉鏡花の作品の中から、『楊柳歌』(明治43)、『南地心中』(明治45)、『紫障子』(大正8)の三作品をとりあげる。詳細については個別に触れるが、三作品はいずれも作者鏡花の京阪地方への旅行体験を素材に用いていることが指摘される作品である。三作品ともに、^{かみがた}〈京阪〉へ「おのぼり」する人物が登場する。しかし、後述するように、明治末から大正期に〈京阪〉へ「おのぼり」というのはやや不自然である。この「おのぼり」という表現はどのようにして生み出されたのか。また、作品の中でどのように機能しているのかを検討したい。もし、これらの間に連絡が見いだせるとすれば、作品中の微細な表現が思いがけず作品全体に結びつく、鏡花の創作方法の一端を明らかにすることができるはずである。

1. 『楊柳歌』

多くの鏡花作品がそうであるように、『楊柳歌』という作品にも、作者鏡花の実体験が色濃く反映している。『楊柳歌』の素材の重要な部分は、弦巻克二氏が「喜多村の誘いで上洛、その折の節分の風習である^ゝお化け、の見聞から構想されたものではなかったろうか¹⁾と明らかにした通り、節分という時期に鏡花が京都へ旅行した際の体験に拠る。既に弦巻氏も指摘した通りだが、鏡花のいくつかの文章からその旅行の様子はうかがえる。例えば、「明治四十三年庚戌年二月」と記された単行本『白鷺』の「序」(明治43)には、以下のようにある。

この頃人に誘はれて、京へのぼつて狂言見た、さす手ひく手に川鼓、祇園の窓に千鳥鳴く、妹がりならねど置炬燵の転寝の夢さむれば、東都の朝は雪にして、白鷺の校正も三寸五台と積りけり。

ここに、「京へのぼつて」という言葉が見えることに注意しておきたい。『楊柳歌』の冒頭、作品の主人公、役者である清之助は「着いた晩です……それ、心得た顔をして、翻然と威勢良く飛下りると……もう一足で既の事に踏込まうとしたんだよ。暗さは暗し、勝手は知らず、いや、おのぼり、のつけに吃驚さ。……確か此処だつけ」(一)と言って、京都の電車から降りようとして失敗し驚いた体験を話している。したがって、作中人物・清之助の驚きが、鏡花の京都体験を反映しているならば²⁾、清之助の「おのぼり」という自己認識もまた、鏡花の意識を反映しているように見える。

同じような例は、尺牘『千鳥さん』(明治43)にも見られる。

拜啓。相かはらず徹宵の宴、白昼のさゝめごと、こゝをせんと御不養生の事と案じ申候。其の後、洛中の女房たち音信にも、引続き大入の趣嬉しく存じ候、さて小生此のたびの京のぼりは、予ての広言さだめて目覚しく、おすどす連中をなぎたて申すべく、五條の橋を渡る時は、欄干へ駆けあがるほどの、はなれわざ仕るべしと、江戸ツ児の面々いづれも世に頼母しく存じ居り候ところ、何事ぞアノ体は。

田中勲儀氏は「尺牘「千鳥さん」(発信日不明、「新小説」明治43・3に発表)は、帰京後の鏡花が、いまだ京都で続演中の喜多村に宛てた書簡であろう」³⁾と指摘しているが、この文章からは鏡花が「京のぼり」に際し、京言葉を話す「おすどす連中」と「江戸ツ児」とを対峙させるかのように見ていることが読み取れよう。

作品には、鏡花が京言葉を意識したことも反映していると見てよからう。『楊柳歌』の中で清之助は、京都を案内してくれる藝妓のお桐から「おのぼりは鮒を見物するものと悟つた風で」(四)見られていたり、お桐の妹分である岸勇から「車夫はん連れまうて、お参りしたら、おのぼりはんのやうやないか」(十七)などと聞かされたりする場面がある。「おのぼり」の清之助にとって京言葉は、京都の町を差別化するものとして響いている。

ただし、明治40年代の京都旅行は、はたして「おのぼり」であったらうか。稿者は以前、夏目漱石『虞美人草』(明治40)の宗近と甲野の会話の中で、京都の電車が「名所古蹟」として古い町である京都の象徴のように扱われていることと対比し、『楊柳歌』の「おのぼり」には《時代錯誤》の側面があると論じたことがある。⁴⁾

実は、鏡花の言説でも京都への「おのぼり」という意識が見られないものもある。談話「京都の印象」(明治43)の一部分を引用する。

私は今度初めて京都にいつて見た、初めて見た土地——自然にしても、人事にしてもさうだが、初めてそれに接する時程印象の深いことは無い。で、私が京都の地に入つて、先づ第一に感じたのは色彩の調和が如何にも整つて居ることだ。

この談話の中では、「京のぼり」や「おのぼり」に類する言葉づかいは見られない。先に述べた漱石『虞美人草』の例に照らしてみると、実際のところ、鏡花にとっても京都行を「京のぼり」と意識するには、何らかの仕掛けが必要であったのではないか。

このことについて示唆的なのは、京都を舞台としたもうひとつの鏡花作品『祇園物語』(明治44、初出時『色色紅』)の「はしがき」である。

御存じの弥次郎兵衛、神風の伊勢に詣でて、古市の妓楼千束屋に、上方の檀那と酒落れ、座着の猪口の遣取りには、器用な京談を遣ひしが、中立売千本通り酒も椀子でヒヨイと上る辺栗屋の与太九郎と、一座のおやまの買論するや、忽ち管を巻舌にて、おへんが変じて違えねえの真中のおぢいと成る。此の篇の京言葉、覚束なくも路一条は辿ると雖も、綾が八衢に及ぶ時は、四条小橋でトボンとして、祇園は何処だと云ふやうな、おのぼり式が沢山あり。これしかしながらお弁女郎のためにはあらず、なかへ酒に酔へるにあらず、作者まことに真面目にこそ。

鏡花はこの中で、『祇園物語』作中の「京言葉」が「覚束なく」「おのぼり式」として言い訳めいた言葉を述べている。注目したいのは、波線部で『東海道中膝栗毛』七編下(文化5)に言及している点である。『東海道中膝栗毛』を引用する。⁵⁾

弥次「イヤまだひがしに見物してへ所があるが、マアけふは、北野の天神さまへいきやせう トだんへみちをたづねてほり川どをりに出 北八「ときに、おもひ出したことがある。ソレ伊勢の古市で、京の人と一座したが、慥にその人は、千本通中立売とやらいつたが、北野の天神さまへ、ゆく道だといつたじやアねへか 弥次「ヲ、さ辺栗やの与太九郎か 北八「ソレへ、そいつが所へ尋ねていつて、酒でも呑でやろうふじやアねへか

京へやってきた弥次郎兵衛と北八が、伊勢古市の妓楼で知り合った中立売千本通の「辺栗やの与太九郎」なる人物を訪ねようとする場面である。京都への「おのぼり」は、『東海道中膝栗毛』の弥次郎兵衛・北八を想起するなど、近世的な枠組みを利用することで成り立つのではなからうか。この『祇園物語』「はしがき」がそうであるように、『白鷺』序も、尺牘『千鳥さん』も、近世風を装った文体であったことは偶然ではあるまい。鏡花の「京のぼり」は近世的な枠組みに身を委ねた遊戯的な《時代錯誤》による「京のぼり」であろう。

考察を『楊柳歌』に戻したい。『楊柳歌』の作中人物・清之助の「おのぼり」という自己認識が、鏡花の遊戯的《時代錯誤》を反映していることは、作品世界の成立にとってどのような意味を持ていようか。

例えば、京都の節分の日に行われる「お化け」という風習で仮装した藝妓たちを乗せる人力車を見上げ、「初手の羅生門に度肝を抜かれて、続いた眷属はよくも見ず」(四)と驚く清之助の視野の中では、京都の町は「百鬼夜行」が行くような異界の光景となっている訳だが、まさしく遊戯的な《時代錯誤》に支えられていると言えよう。その視野の中では、清之助を案内して歩くお桐が手に持った風船は、「おのぼりの此の魂が、お桐の織手に、糸で留まつた事」(十八)と想像させる。そうした道行きの延長線上に、清之助はお桐によって「藝子はんが心中をしやはる」(九) 場所である「児ヶ淵」に誘われることになる。清之助は、お桐の入水を思いとどまらせるべく清水寺の舞台上で過去に入水したお桐の姉に扮する。こうした作品の展開を見るとき、清之助の「おのぼり」という自己認識は、京都の町に異界を立ち上げる起点であり、作品のクライマックスまでを支える要素であったと言えよう。

2. 『南地心中』

『南地心中』も、田中励儀氏が「明治四十四年十月下旬の大阪での見聞を基に、翌年一月一日付で発表された作品である」と述べ詳論した通り、道頓堀中座に出演中であった喜多村緑郎に招かれた、鏡花の大阪体験を素材として成立している。⁶⁾

作品は、「初阪」なる人物が大阪見物をする視点から語られていく。冒頭近く、「天満橋を北へ渡越した処で、同伴のものに聞いた。／「今のは？」／「大阪城でございます

さ。」(一)とあるように、案内を伴って大阪の町を見物して歩く「初阪」の視野に、大阪を訪れた鏡花が見た実景と重なるところがあるのは想像に難くない。その「初阪」が、中座で芝居見物をした折、棧敷席に娘を一人入れてくれるように頼まれる。「初阪」は、「資本は懸らず、恚う云ふ時、おのぼりの気前を見せるんだ、と思つたから、さあへ御遠慮なく」(六)などと引き受ける。実はこの娘が美津という名で、作品の主要な人物のひとりであった訳だが、ひとまずは『南地心中』の「初阪」にも、「おのぼり」の自己認識があったことを確認しておきたい。

「初阪」は、工場の煙が昇る大阪の町の風景に臨んで、「天守の千畳敷へ打込んだ、関東勢の大砲が炎を吐いて転がる中に、淀君をはじめ、夥多の美人の、練衣、紅の袴が寸断々に、城と一所に滅ぶる景色が、目に見える」(二)と今はない大阪城天守を思い浮かべる。「大阪の町は、通も路地も、何の家も、くわつと陽気に明い中に、何処か一個所、陰気な暗い処が潜んで、礼儀作法も、由緒因縁も、先祖の位牌も、色も恋も罪も報も、三世相一冊と、今の蛇一疋づゝは、主に成つて隠れて居さうな気がする処へ、蛇瓶の話をして昨日聞いて、まざへと爪立足で、黒焼屋の前を通つてからと云ふものは、うつかりすると、新造も年増も、何か下搔の褌あたりに、一条心得て居さうで成らない」(六)と、高津の蛇屋を知って以降、その蛇の姿に脅かされるような気にさえなる。「初阪」が見物する「おのぼり」の視野の中に、『南地心中』の大阪の町は広がっている。

「初阪」は中座の棧敷席で、船場の大金持ち丸官とその手代の多一、丸官に落籍された美しい女・お珊と出会うことになる。多一は「初阪」が棧敷席へ招き入れた美津と言ひ交わした仲であり、作品末尾では多一に想いを寄せていたお珊によって多一と美津とが毒殺されることになる。お珊も自害して心中する。こうした展開において、「初阪」が中座へやって来た多一を指して「其手代に違ひない。……当時の久松と云つたのが、前垂がけで、何か急用と見えて」(十)と言ひ表すことには意味があろう。「久松」はお染と心中する人物として『新版歌祭文』などの演目に登場する。大阪の町は『心中天網島』『冥途の飛脚』など心中ものの舞台となってきた。『南地心中』はそうした心中を、当代の大阪の町に実現しようとする作品である。⁷⁾

ただし、田中氏が「事件が展開する後半には、もはや話の引出し役たる初阪は役割を失ひ、表面に現われることはない」⁸⁾と指摘する通り、視点人物としての「初阪」はやがて後退してしまう。それでも、お珊は金銭に縛られることに抗い心中を遂げる。つまり、作品を成立させる上で重要なのは、視点人物としての「初阪」とその視野であって、「初阪」その人ではなかったことになる。この点からも、「初阪」の「おのぼり」の視野が、当代の大阪を心中の起こり得る町へと変貌させる役割を担っていたと理解できよう。

3. 『紫障子』

「作者」が語り手となって、「木菟は……私の友人を恚う名付ける」(一)と言う『紫障子』は、「木菟」という人物が南地の藝妓・蘆絵に案内されて、大阪から奈良、京都を巡るうちに遭遇した怪異を語る作品である。本作にも、田中勲儀氏による詳論がある。

田中氏は、当時大阪に居た作家の水上瀧太郎を尋ねて「大正七年三月、関西に遊んだ鏡花の体験に基づいている」と指摘している。⁹⁾

木菟が「阪地言葉」(三)を意識する「おのぼり」であることは、蘆絵に向けて「願はくは、構はず、うまれたまゝの舌の小唄を、自由自在に聞かして貰ひたいのだと、此のおのぼりは言ふのだけれど、聞取り悪いと思ふ所為か、それとも調子が合はせいゝと思ふのか、窮屈さうに(ですよ。(ねえ。))で言葉を合はせる」(三)などという場面に顕れている。また、ふたりが奈良の地で宿泊した旅籠を選んだ事情は、「春日様の鹿は、今日は、とお辞儀をして煎餅を食べるし、おのぼり木菟はおいでやす、で、絵馬堂の煮込を囓る、と知つたあとで、晩の泊を、菊水か、ホテルか、と案内者の蘆絵は言つたけれど、スリッパで廊下を迂るのは、此の土地に相応はない。膳にお平と中壺のついて出る昔の本陣とでも言つたやうな旅籠を、と木菟の注文で」(七)と説明される。木菟は遊戯的《時代錯誤》を楽しんでいると言ってよからう。しかし、この旅籠で出会った女が翌日宿泊することになった京都の玉芝という宿の女主人で、実は「毎月生駒の聖天に参籠する」(二十六) 蛇の妖術の使い手であり、その術のために蘆絵は命を落とすことになる。遊戯的《時代錯誤》を楽しもうとする「おのぼり」の嗜好が、ここでは異界を立ち上げるきっかけとなる。¹⁰⁾

蘆絵が京都停車場で「自動車」^{タキシイ}を捕まえる様子を、木菟は「模様の花は、濡れても露で好いとして、雨にしとりを見せてむくりと頭を並べた発動機が、巨大な牛の面に見える処へ、ふっと地を摺つて青白い光を放つ電燈は、這奴が鼻嵐を噴く形で美しい、姿は、其の間に挟つて、上品な紗綾形の濃い紫紺のコートを被た姿ぐるみ、一束に挫折つて、鞍に着けられさうで、痛々しかつた。／呪詛はれたやうだ、牛の時詣に」(三)などと想像しつつ見ているが、この遊戯的な「おのぼり」の目が、後に起こる不吉を先取りしているのは、木菟の視野こそが怪異の場を作り支えていることの証左に他なるまい。

ところで、大阪の水上瀧太郎を鏡花が尋ねた体験により書かれた『紫障子』の「おのぼり」という表現を検討するにあたって、やや問題を拡散することにはなろうが、考えておきたいことがある。『紫障子』作中では、「征矢」という人物が、木菟が案内の藝妓として蘆絵を希望したのを世話したことになっている。木菟に対して「此の日其のおのぼりに対して、吹曝しの辻に立ちながら、征矢は苦笑もしないで、真面目に心配し」(十二)、南地のことで知らない藝妓ではあるが、その世話を請け負ったのであった。蘆絵はそのときのことを「凜々しい方が、私のやうな、こんなものに、貴方を頼むと、膝を正してお言ひなすつた」(十二)と振り返っている。もちろん「征矢」のモデルとなったのは、水上瀧太郎である。

水上瀧太郎には、『大阪』(大正11)¹¹⁾という作品がある。この中で、大阪勤務となったサラリーマンの三田は、拜金主義にまみれたような商業都市大阪の町を好い感情を持って見るができない。作品の一部を引用する。

子供の頃夢中になつた絵本の感化か、生来さういふ性分なのか、しんねりむつり底意地悪く天下をとつた徳川家康が大嫌ひで、真田幸村を崇拜したために、

お城に対しては感慨が深かつたが、何処に行つてもせせこましく、贅六そのもののやうな町の有様は、決して懐しい感じを起させなかつた。

今日になつても、彼は贅六が嫌ひだつた。贅六といふ言葉の属性であるところの我利々々貪欲吝嗇に、まのあたり取囲まれて、これからさき幾年間暮すのだらうと考へた時は、つくづく月給取の身の上をはかなんだ。学校の寄宿舎に居た時代の知つた顔も、少しはあるにはあるのだつたが、概して純粹の大阪人には知己が無かつた。(一の一)

ここで三田は、大阪の人たちを指して「贅六」と呼んでいる。『浮世風呂』二(文化6)に「夫だからおめへがたの事を上方ぜへろくといふはな」¹²⁾とあるように、江戸っ子が上方の者を罵って言う言葉であるが、三田はこの表現を用いて大阪の人と町との性質を浮き彫りにしようとしている。

泉鏡花『紫障子』と水上瀧太郎『大阪』は、ほぼ同時期の大阪の町を作中に書いており、その景色を共有しているはずであるが、ふたつの作品を比べてみれば、一方は、〈京阪〉を訪れた自らを「おのぼり」と認識することで遊戯的《時代錯誤》な視野を獲得して怪異の場を生成していく作品、もう一方は、周囲の大阪の人を「贅六」と呼ぶことによってその拜金主義をあぶり出していく作品と言うことができよう。「おのぼり」「贅六」は、それぞれの作品を特徴づける表現である。方向性は正反対ながら、どちらの作品においても登場人物の用いる言葉ひとつひとつが、作品の構想と関わっていると言える。ただし、『大阪』で三田が言う「贅六」はあからさまではある。

おわりに

本稿では、鏡花作品の中かから『楊柳歌』『南地心中』『紫障子』という三つの〈京阪〉を舞台とする作品を取り上げて、これらの中に見る「おのぼり」という表現について検討を加えた。作品中の〈京阪〉への「おのぼり」は、『東海道中膝栗毛』などに擬え、近世風を装うことで獲得される視野であった。また、いずれの場合にも「おのぼり」の視野は作品中に異界を立ち上げ支える要素になる。交流のあった水上瀧太郎の作品との比較は、鏡花作品の「おのぼり」の特異性を際立たせよう。鏡花作品に見られる〈京阪〉への「おのぼり」は、作品内に異界を成立させるための、創作の方法であると言えるだろう。

注

- 1) 弦巻克二「『楊柳歌』私注」(「ことばとことのは」7/あめつち会/平成2年)。
- 2) 田中勳儀「関西の鉄道と泉鏡花」(『鉄道—関西近代のマトリクス』/和泉書院/平成19年)に指摘がある。
- 3) 田中勳儀「『祇園物語』の成立過程—泉鏡花と京都」(『泉鏡花文学の成立』/双文社出版/平成9年〔(初出)泉鏡花研究会編『論集泉鏡花第二集』/有精堂/平成3年〕)。
- 4) 拙稿「『楊柳歌』の京都、あるいは清水寺—観音功德の顕現をめぐる—」(泉鏡花

- 研究会編『論集泉鏡花第五集』／和泉書院／平成23年)。
- 5) 『新編日本古典文学全集81 東海道中膝栗毛』(小学館／平成7年)。
 - 6) 田中勳儀「『南地心中』の成立過程—泉鏡花と大阪」(『泉鏡花文学の成立』／双文社出版／平成9年〔初出〕「日本近代文学」第35集／昭和61年10月)
 - 7) 拙稿「『泉鏡花『南地心中』の大阪—見物、演劇、ならびに心中—」(『語文』106・107／平成29年2月)において論じた。
 - 8) 注(6)に同じ。
 - 9) 田中勳儀「『紫障子』の成立過程—泉鏡花と奈良・京都・大阪」(泉鏡花研究会編『論集 大正期の泉鏡花』／おうふう／平成11年)
 - 10) 拙稿「泉鏡花『紫障子』の京都、奈良—「自働車」の走る怪異譚—」(「りずむ」9／白樺サロンの会／令和2年3月)において扱った内容である。
 - 11) 『水上瀧太郎全集』四卷(岩波書店／第二刷／昭和58年)
 - 12) 『新日本古典文学大系86 浮世風呂 戯場粋言幕の外 大千世界楽屋探』(岩波書店／平成元年)

【付記】『楊柳歌』『南地心中』『紫障子』その他の泉鏡花作品、談話等の引用については、原則として『鏡花全集』(岩波書店／第二刷／昭和48～51年)に拠った。すべての引用について、旧字は適宜通行の字体にあらため、ルビは一部を除き省略した。引用文中の^シ/_ミは改行を示す。傍線は稿者が付した。

なお本稿は、第60回表現学会全国大会シンポジウム「鏡花と表現」の冒頭で、泉鏡花の創作と表現をめぐる問題提起として、司会者から短時間の小発表を行う予定であった内容である。大会前日の悪天候の影響でシンポジウムの時間を短縮したため、当日は資料の配布のみ行った。交通機関の乱れ等の影響少なくない中、シンポジウムにご参加くださった皆さまに感謝申し上げます。

(帝塚山大学)